

フランス中央高地におけるランドネとツーリズム

— R.L.スティーブソン『旅はロバを連れて』 —

市川康夫

筑波大学生命環境系

本研究は、19世紀末の紀行文『旅はロバを連れて』（R.L.スティーブソン著）に着目し、フランス中央高地におけるランドネとツーリズムの関係を文化的資源とのかかわりから論じたものである。スティーブソンの道は、フランスランドネ連合（FFR）によるルート整備が契機となり、スティーブソン組合の結成によって実現した。組合はEUや国、地域からの補助金によって成り立ち、さらに営利を主目的としないことでオルタナティブなツーリズムが形成された。一方、ランドネ旅行者は、文化的資源だけではなくランドネを通じて得られる自己の体験、あるいはイメージに旅の動機を向けていた。まだ見ぬ土地への何かを求める欲求、そしてテロワールを感じる場所としての山村イメージが、セヴェンスのランドネへと旅行者を駆り立てている。スティーブソンの道は、ランドネ旅行者と文化、自然、テロワールとの相互作用の過程にあるツーリズムということができよう。

キーワード：ランドネ、文化的資源、紀行文、『旅はロバを連れて』、ツーリズム、フランス

I はじめに

1. 研究課題

近年、健康や環境への関心が高まるなか、ハイキング・トレッキングのブーム、トレイルやフットパスの整備によって、「歩くツーリズム」が注目を浴びている。特にヨーロッパでは、「サンティアゴ・デ・コンポステラへの道」が世界的に注目されたことで、徒歩によるツーリズムへの需要が増大している。

そこで本研究が注目するのは、フランスにおける「ランドネ（Randonnée）」である¹⁾。フランスでは歩くアクティビティの総称は「ランドネ」と呼ばれ、国民が好むスポーツの第一位となっている（Pôle Ressources National Sports de Nature, 2011）²⁾。また、バカンスにおいてフランス人の最も多くが選択するアクティビティは「歩くこと」である（CMA Haut-Savoie, 2011）。ランドネ愛好家の多いフランスでは、約600万人が15年以上の継続的なランドネ経験を有しており、ランド

ネはスキーと並んでフランス山地ツーリズムの二大要素となっている（Guilbert, 2003）。

グランドツアー以降、歩くことはツーリズムにおける最も基礎的な行為として認知されてきた一方で、1980年代以降に発展してきた「歩くツーリズム」であるランドネは、いわば「古くて新しいツーリズム」ということができる（Corneloup, 2012）。他方、ランドネに関しては学術研究の分野から十分な注目を受けてこなかったことが指摘されており、その理由として経済的な価値評価の難しさが挙げられている（Association sur le chemin de R.L. Stevenson, 2010；Farama, 2012）。しかし、現在フランス国内で整備されたランドネのルート総延長は約10万kmを超えといわれ、その潜在的な経済価値はもはや無視できない（CMA Haut-Savoie, 2011）。また、特にランドネ旅行者の目的地の大半が山間地域であり、近年バカンス地として再注目されている農山村を鑑みた場合、その存在は重要な要素といえる（Pôle Ressources National Sports de Nature,